

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04653

研究課題名(和文) 中学生の自己肯定感向上に繋がる音痴克服のための歌唱指導法に関する実証的研究

研究課題名(英文) Substantial Study on Singing Instruction Method for Overcoming "Onchi" Leading to Improvement of Self-Esteem of Junior High Students

研究代表者

小畑 千尋 (OBATA, CHIHIRO)

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20364698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、歌唱における生徒自身の内的フィードバック能力(自分自身の歌唱の音高・音程があっているかどうかについての認知)向上と生徒の心理面に着目して、中学生の自己肯定感向上に繋がる音痴克服のための歌唱指導法に関する実証的研究を行うことである。中学生を対象とした実態調査からは、中学生の約5割が自分自身を音痴だと思っており、音痴意識と内的フィードバック能力との関連もみられることが明らかとなった。また音痴意識を持つ中学生を対象とした歌唱指導の実践においても、内的フィードバック能力の向上が、歌うことへの自信に関係することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中学校では、音楽の授業だけでなく、校内合唱コンクールなど他者と歌う機会が多々あるにもかかわらず、音痴克服に向けた具体的指導法がなかった。本研究により、中学生自身の音痴意識と内的フィードバックを中心とした歌唱技能についての実態を明らかにすることができた。さらに、内的フィードバックに着目した歌唱指導を行うことが、生徒自身の歌うことへの自信に繋がる可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study to perform a substantial study on singing instruction method for overcoming "onchi" leading to improvement of self-esteem of junior high students focusing on improvement of students' ability to give internal feedback (recognition of tone and pitch of own singing) and their psychological status. A factual survey for junior high students has revealed that approximately 50% of junior high students think that they are "onchi" and relationship between awareness of "onchi" and ability of internal feedback. Further, it has also been suggested in the practice of singing instructions for junior high students having awareness of "onchi" that improvement of ability for internal feedback leads to confidence on singing

研究分野：音楽教育学

キーワード：音痴克服 中学生 自己肯定感 歌唱指導 内的フィードバック 変声

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中学校では、音楽の授業だけでなく、校内合唱コンクールなど他者と歌う機会が多々ある。一方、成人を対象とした質問紙調査からは、自分自身を「音痴」だと思ってしまうようになった時期として、「中学生の頃」が最も多いことが明らかとなっている(小畑 2007)。また、小学校における縦断的歌唱調査からは、6 学年 2 月の卒業直前の段階でも約 25%の児童が内的フィードバック(自分自身の歌唱の音高・音程が合っているかどうかの認知)ができないことが浮き彫りとなった(Obata 2013)。これらの結果から、中学校でも歌唱時に内的フィードバックができず、不安な状態で歌っている生徒がかなりの割合いると考えられる。しかし、中学生を対象とした内的フィードバックに関する調査は実施されておらず、さらに中学生の歌唱における音痴意識に関する実態調査もなされていない。

児童の歌唱に対する意識調査では、内的フィードバックは、歌唱活動における意欲、自信、自己肯定感に強く関連することが示唆された(Obata 2012)。内的フィードバックができない生徒は、思春期の変声の問題以上に、他者と声を合わせて歌えたという達成感が得られず、劣等感を持つことになりかねない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、歌唱における生徒自身の内的フィードバック能力向上と生徒の心理面に着目して、中学生の自己肯定感向上に繋がる音痴克服のための歌唱指導法に関する実証的研究を行うことである。具体的に以下の 3 項目を実施する。

- (1) 研究協力校(A 中学校)の全校生徒を対象に、自身の歌唱における音痴意識の調査と内的フィードバック能力を中心とした歌唱技能の調査を行う。
- (2) さらに調査対象年齢を拡大し、複数の小学校(高学年)・中学校において、歌唱に関する意識についての実態調査を行う(一部の小・中学校では、歌唱の内的フィードバック能力の調査も実施)。なお、(1)の調査において、本研究開始当初は予想していなかった結果が得られたため、A 中学校特有の結果であるのか、他の中学校でもみられる傾向なのかを明らかにするため、(2)の調査を追加した。
- (3) (1)(2)で得られた結果と本申請者が開発した内的フィードバック向上のための指導法(小畑 2017)を基に、「音痴」意識を持ち、歌唱指導を受けることを希望する中学生を対象とした歌唱指導を実践し、生徒の歌うことに対する認識や歌唱行動の変化について、質的な分析から明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 中学校 2 校でのフィールド調査、予備調査を経て、宮城県の A 中学校全校生徒約 300 名を対象に、生徒の内的フィードバック能力を含む歌唱技能に関する個別調査と音痴意識に関する質問紙調査を実施する。個別の歌唱調査は、小学校での縦断的な歌唱調査での方法(Obata 2013)を用い、音痴意識に関する質問紙調査については、本申請者が開発した音痴意識を問う質問紙調査(小畑 2007; Obata 2012)を基に作成する。
- (2) 宮城県と千葉県の研究協力校において、音痴意識に関する質問紙調査を行う。調査は、発達の特徴も明らかにするため、対象年齢の幅を広げ、小学校 5・6 年、中学校 1～3 年の 5 学年、合計約 1000 名を対象とする。
- (3) 宮城県の研究協力校(B 中学校)において、音痴意識を持ち、歌唱指導を希望する中学 3 年生約 10 名を対象に、歌唱の個別指導、並びにグループ指導を実践する。まず、同校において、同学年の 2 クラス分の生徒(約 70 名)を対象に、小畑(2017)を基にした約 1 時間の「音痴」克服をテーマとしたワークショップを実施する。ワークショップの前後に行った質問紙調査の結果を検討し、B 中学校の音楽教諭と相談の上、指導対象となる生徒を決定する(上記の方法から 11 名が指導対象者となった)。

4. 研究成果

- (1) A 中学校の全校生徒を対象とした自身の歌唱に関する音痴意識と歌唱の内的フィードバック能力についての実態調査

音痴意識に関する質問紙調査と、生徒の内的フィードバック能力を含む歌唱技能に関する個別調査を、2016 年、宮城県の A 中学校全校生徒 318 名(1 学年 103 名、2 学年 124 名、3 学年 91 名)を対象に実施した。

「音痴」意識に関して

質問「あなた自身、自分を『音痴』だと思いますか?」に対して、「非常に『音痴』」に 11.0%、「少々『音痴』」に 36.8%、合計 47.8%の生徒が自分自身を「音痴」だと思つたと回答した(図 1 参照)。

学年別では、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」と回答した生徒は、1 年生が 46.6%、2 年生が 52.4%、3 年生が 42.9%となり、2 年

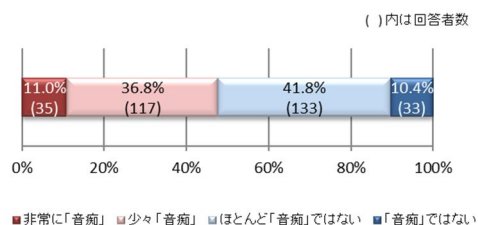


図 1 質問: あなた自身、自分を「音痴」だと思いますか?

生が他の学年よりも自分自身を「音痴」だと意識している生徒の割合が高い結果となった。男女別では、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」と回答した生徒の割合は、男子は 52.7%、女子は 45.7%となり、男子の方が女子よりも自分自身を「音痴」だと意識している割合が高かった。

音痴意識と内的フィードバックとの関連

ここでは、A 中学生の 2 年生 120 名（男子 65 名、女子 55 名）を対象に行った、歌唱の個別調査（単音のピッチマッチと内的フィードバック）と音痴意識との関連について報告する（両調査共に参加できた生徒を分析対象とした）。

音痴意識については、120 名中「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」に 53.3%の生徒が回答した。単音によるピッチマッチの課題で、3 音すべて合わせられた生徒は 52.5%、1 音も合わせられない生徒は 15.8%だった。内的フィードバックができた生徒は 69.5%であった。音痴意識がある群とない群とでは、内的フィードバックができるかどうかについて有意差があり（ $t=2.027$, $df=116$, $p<.05$ ）、単音のピッチマッチができるかどうかについても、有意差がみられた（ $t=2.129$, $df=118$, $p<.05$ ）。

(2) 小・中学校における質問紙調査

(1)の調査からは、47.8%の生徒が自分自身を「非常に」もしくは「少々」「音痴」だと思っていることが明らかとなった。また、中学 1 年次ですでに 46.6%の生徒が自身を「音痴」だと思っているという結果からは、中学入学前にどのくらいの児童が「音痴」意識を持っているのかを調査する必要性が生じた。

そこで、2017 年、宮城県と千葉県の国公立の研究協力校において、音痴意識に関する質問紙調査を、中学校 7 校において各学年 1 クラス、計 679 名（1 学年 229 名、2 学年 218 名、3 学年 232 名）、小学校 2 校の高学年の全クラス、計 418 名（5 学年 219 名、6 学年 199 名）を対象に実施した。

自分自身の歌唱について、中学生では 50.2%の生徒が、小学高学年では 33.9%の児童が、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」と思っていることが分かった。学年別の結果を図 2 に示す。小学 5 年生と 6 年生の間で、「音痴」意識を持つ児童の割合が著しく増え（ $\chi^2=15.89$, $df=3$, $p<.01$ ）、特に小学 5 年生と 6 年生の女子の間で差がみられた（ $\chi^2=10.25$, $df=3$, $p<.05$ ）。小学高学年の歌唱指導においては、男子の変声期の取り扱いに留意することは広く認識されているが、本調査結果から、小学校高学年の女子の歌唱指導についても、十分な配慮が必要であることが示唆された。

中学生男子を対象とした変声に関する質問と、本人の「音痴」意識との関連についての結果を図 3 に示す。「変声前」「変声中」「変声後」「わからない」と回答した生徒の、自分自身を「音痴」だと思ふ生徒の割合、平均値に有意差がみられないことから、男子が「音痴」意識を持つ直接の原因として「変声」を理由にすることは妥当ではないことが明らかとなった。

(3) 音痴意識を持つ中学生を対象とした事例指導

研究協力校 B 中学校において、音痴意識を持ち、歌唱指導を受けることを希望する中学 3 年生の生徒 11 名（男子 5 名、女子 6 名）を対象に、201X 年 5 月に個別面談、7 月に 4 日間連続（放課後、1 日約 1 時間）の個別・グループ指導を実施した。指導プログラムは、ゲーム的要素を取り入れた発声練習、音高・音程弁別、内的フィードバックができるための異なる音高を実感するワーク、同一音高で声を増幅させて共鳴感覚を体感するワークなどである。

本実践の結果、指導前は自分自身のことを「非常に『音痴』」と思う生徒が 4 名、「少々『音痴』」と思う生徒が 7 名であったが、指導後は、自身を「非常に『音痴』」だと思ふ生徒は 0 名、「少々『音痴』」だと思ふ生徒が 6 名、「ほとんど『音痴ではない』」と思ふ生徒が 5 名

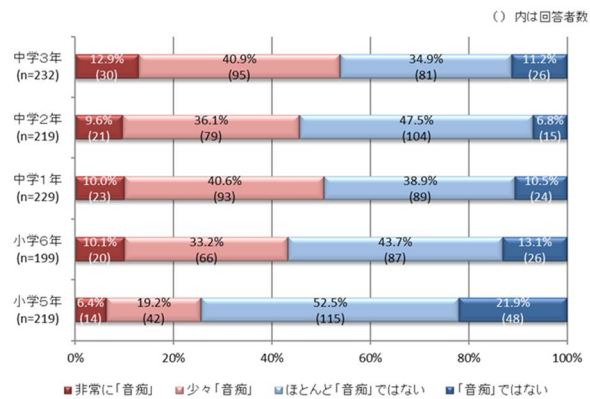


図 2 あなた自身、自分を「音痴」だと思いますか？

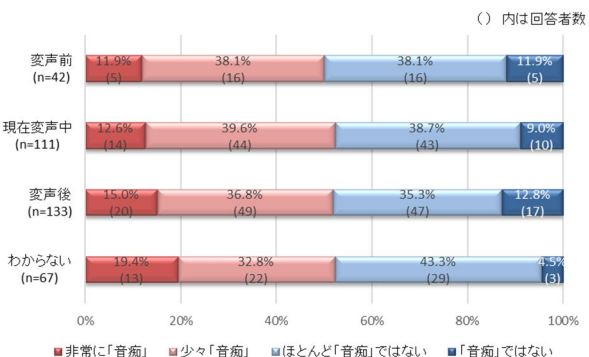


図 3 変声と「音痴」意識との関連（中学生男子）

となり、11名中9名について、「音痴」意識に変化がみられた。また、参加した生徒たちの内的フィードバック能力とピッチマッチ能力を中心とした歌唱技能が向上した。さらに、「今のうちからオンチを克服していると、日常から自分に自信がつくことにつながると思う」「以前より、ためらわないで歌うことができた」「この4回のレッスンで、大きく成長できた。声域が広がったり、周りの音を聞き分ける力がついたり、自信をもって歌えるようになったりと、自分におこった変化を、とてもうれしく感じた」「少しずつ自信を持って声量を増やして歌うことができるようになった」など、歌うことに対する自信、意欲など心理面における変化もみられた。

<引用文献>

小畑千尋(2007)『「音痴」克服の指導に関する実践的研究』多賀出版

OBATA, Chihiro (2012) "An Investigation of Elementary School Students' Attitude toward Singing at School From the Viewpoint of Internal Feedback ." *The 30th ISME World Conference Proceedings* (CDROM).

OBATA, Chihiro (2013) "A longitudinal Study on Internal Feedback in Singing of Children: Through Analysis of Change from Fourth to Sixth Grades in a Primary School" *The 9th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research* (CDROM)

小畑千尋(2017)『さらば！オンチ・コンプレックス <OBATA METHOD>によるオンチ克服指導法』教育芸術社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 小畑千尋・高木夏奈子・木村升美	4. 巻 54
2. 論文標題 幼児の表現活動を支える保育者の歌唱に対する認知－保育者養成における「音痴」克服のピアサポート事例の分析を通して－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 267-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://id.nii.ac.jp/1138/00000827/	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小畑千尋・佐藤恭子・遠藤宏紀・田代七菜美・中島瞳・渡部智喜・玉手英敬・吉村敏之	4. 巻 1
2. 論文標題 幼小接続を考慮した声の表現に着目した音楽科の授業開発 対話型鑑賞による「聴こえる美術館」の授業実践を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6. 最初と最後の頁 61-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://id.nii.ac.jp/1138/00000856/	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小畑千尋	4. 巻 No.989
2. 論文標題 フロントライン教育研究 歌唱における「音痴」克服の指導に関する研究 子供たちの主体的な歌唱活動にむけて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小畑千尋	4. 巻 53
2. 論文標題 中学生の歌唱における「音痴」意識 質問紙による実態調査を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 201-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://id.nii.ac.jp/1138/00000774/	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小畑千尋・田代七菜美・高見秀太郎・佐藤恭子・大場飛鳥・赤井美奈・千葉はづき	4. 巻 26
2. 論文標題 小学校における声の表現に着目した授業開発：タブレットを活用した音楽授業実践を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城教育大学情報処理センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://www.ipc.miyakyo-u.ac.jp/nenpo/no.26pdf/03.pdf	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小畑千尋	4. 巻 52
2. 論文標題 大学生の歌唱における「音痴」意識 2000年と2013年の比較を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 171 - 179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://id.nii.ac.jp/1138/00000654/	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Chihiro OBATA
2. 発表標題 Questionnaire Survey on Singing by Fifth- through Ninth-Graders Students in Japan: Focusing on Inferiority Complex toward "Onchi" Consciousness
3. 学会等名 The 12th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (Macao) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 C. Victor Fung, Hiromichi Mito, Chihiro Obata, Hiromi Takasu, Nozomi Azechi, Yoko Ogawa, Hiroshi Suga, Yuki Kuwaharada
2. 発表標題 Music Participation and Quality of Life of Senior Citizens in Japan
3. 学会等名 The 12th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (Macao) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小畑千尋
2. 発表標題 小学生・中学生の歌唱における「音痴」意識：学年差および性差の検討
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回全国大会（東京芸術大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤恭子・小畑千尋
2. 発表標題 声の表現に着目した授業開発における教員としての資質・能力の育成 対話型鑑賞を用いた教員養成における 実践の分析を通して
3. 学会等名 日本音楽教育学会令和元年度東北地区例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Chihiro OBATA
2. 発表標題 Inferiority Complex for Singing and Voice Changing of Japanese Junior High School Students: Focusing on Gender Differences toward the “Onchi” Consciousness
3. 学会等名 The 33rd ISME World Conference (baku) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小畑千尋
2. 発表標題 歌唱におけるオンチ克服
3. 学会等名 全国大学音楽教育学会第34回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chihiro OBATA
2. 発表標題 Inferiority Complex toward Singing in Japanese Junior High School Students: Analysis by Questionnaire Survey for “Onchi” Consciousness
3. 学会等名 The 11th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research (Malaka) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小畑千尋
2. 発表標題 中学生の歌唱における「音痴」意識 質問紙調査の分析を通して
3. 学会等名 日本音楽教育学会第48回全国大会 (愛知教育大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Chihiro OBATA
2. 発表標題 Inferiority Complex toward Singing in Japanese Teacher Training Course University Students: Comparative Analysis of Questionnaire Results on Onchi Consciousness in 2000 and 2013
3. 学会等名 The 32nd ISME World Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 阪井恵・酒井美恵子編著, 小畑千尋他 (分担執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 175 (担当: 音程が外れる児童への指導) 他 pp.80-83.)
3. 書名 小学校音楽 指導スキル大全	

1. 著者名 齊藤忠彦,菅裕編著,小畑千尋他(分担執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 253(担当:歌唱の活動を通して育成する資質・能力 pp.36-37.)
3. 書名 新版 教員養成課程 中学校・高等学校音楽科教育法	

1. 著者名 編著者:有本真紀・阪井恵・津田正之 著者:石上則子・井上恵・牛越雅紀・小畑千尋・櫻下達也・古山典子・権藤敦子・齊藤忠彦・酒井恵美子・清水匠・城佳世・末永有哉・菅裕・高見仁志・長井覚子・西沢久実・長谷川慎、他4名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 224p.(担当:「A表現」歌唱分野 pp.16-20)
3. 書名 新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法	

1. 著者名 秋田賀文・石川裕司・板野和彦・伊藤誠・伊野義博・野正直・小川昌文・小川容子・尾崎裕司・小畑千尋・尾見敦子・角谷史孝・櫻下達也・勝山幸子・加藤徹也・加藤富美子・金子敦子・河野正幸・菅道子・木下大輔他57名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 238p.(担当:音高・音程を合わせられない生徒,変声期の生徒に対する指導 p.58)
3. 書名 中学校・高等教員養成課程用 最新・中等科音楽教育法	

1. 著者名 初等科音楽教育研究会編,小畑千尋他(分担執筆)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 255(担当:「音高・音程を合わせられない児童に対する指導」p.60)
3. 書名 小学校教員養成課程用 最新 初等科音楽教育法	

1. 著者名 小畑 千尋	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 160
3. 書名 さらば! オンチ・コンプレックス ユキ&ケンと一緒に学ぼう! OBATA METHOD によるオンチ克服指導法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>取材協力: 「音痴」 『Newton別冊 体と科学知識 体質編』 (2018年) ニュートンプレス 教材監修: ベネッセ 「進研ゼミチャレンジ4年生」 (2019年11月号) 『わくわく発見BOOK』 「きたばたがゆく! キミの疑問大調査! オンチはこく服できるのか」</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考